

ヒノキゴケ入門

特性と管理のポイント

基礎

《大型のコケは環境の変化に弱い 時間を掛けて育てる》

屋久島を代表する苔の一つ。柔らかい印象で大型の草姿はテラリウムで育てやすく、人気の素材です。露地植えは難しいと言われますが、場所を選び、土壌改良を行い、芽数を殖やすように時間を掛けて育てます。定着さえすれば管理は容易です

特徴と植えつけのポイント

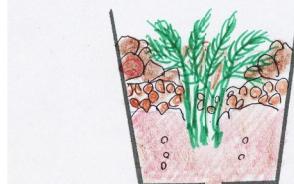
大型の苔の特徴



観察してみると

- ・林の中の土を培地にして育つ苔が多い
 - ・大きな体を固定するため仮根が発達
 - ・生育環境により草姿の大小に差が出る
 - ・徒長は早いがコロニーの密度アップは遅い
 - ・植付け等で環境が変わると変色しやすい
 - ・スギゴケを除いて安定した半日陰を好む
- 植付・管理では
- ・通気性、排水性の良い土に土壤を改良
 - ・過保護に徒長させず、強く小さく育てる
 - ・移植法で殖やしやすい

ヒノキゴケは土つくり



ヒノキゴケやスギゴケのように大型のコケは、その体を支えるためたくさんの仮根を深く土の中に広げています。また大型のコケほど環境の変化（直射光や乾燥）に弱いため、土からの露出が少なくなるよう目土の量も多くなります。重い粘土のような土や目土ではヒノキゴケは育ちません。土の中で小さな仮根が育ち、その土の中から新芽が伸びるには、軽く通気性があり、しかも適度な保水力のある土が必要です。鹿沼土や赤玉土、砂、バーミキュライトなどを加えた土壤改良は必需です

新芽を育てる



ヒノキゴケのような大型の苔は、安定した環境で、長い時間掛けて育つため、環境が変わると葉先が変色したり、コロニー全体が褐色化してしまうことがあります。変色しても枯れたわけではありませんが、ここから元の色に回復させるのは大型のコケほど大変です。そこで変色したヒノキゴケはこれを親株として、そこからの新芽を発芽させるように管理します。親株を回復させるのではなく、新芽を殖やして大きく育てたほうがコロニーの形成は早く、手間もかかりません。



穏やかで安定した環境で

穏やかな林の中に自生するヒノキゴケなので、露地では直射光と、風通しの良い場所は避けて植えつけます。土壤は乾きにくい保水性と、雨が降っても水溜まりのできない保水性とのバランスの良い土作り



露地植えには丈の短いものを

日陰の湿潤地で大きくふわりと柔らかいヒノキゴケに育ちます。大きく育った苔はテラリウムやアクアリウムに。種ゴケや露地植えには見栄えが悪くても、丈が短く生育密度のあるコケがお勧め（ヒノキゴケの出荷）

明るい半日陰で、土は乾燥させない

ヒノキゴケは乾燥と湿潤の繰り返しを嫌います。直射光が短時間でも当たると土は乾き、風通しの良い場所も苔を乾燥させます。これを繰り返すとヒノキゴケは変色し、新芽も育ってくれません。広く植えるよりも、池の縁や岩陰などのから始めて、少しづつ植やしていくのがお勧め

